

# 背徳行為にふれる日常

## ー 閉鎖的地下空間からの解放ー

### Keywords

都市生活 背徳感 ストレス社会  
地下鉄空間 地上と地下

DZ20112 大嶋千尋



### 1. はじめに

「背徳感」は私にとって至福の瞬間だ。頑張りすぎてしまう私にとって、課題から逃避してだらだらと過ごすことや、寝坊をいいことにゆっくり家を出ることなど、たまにの背徳行為が都市生活からの緊張を解き、再び頑張ろうという気持ちが湧いてくる。このような体験から得た背徳行為を活用したリフレッシュの方法が、現代の人々にとって必要なのではないかと考えた。都市の中で背徳行為を助長する空間があれば、人々は一時的にストレスフルな都市生活から解放されるのではないかという私の仮説と好奇心から始まった研究である。

### 2. 研究背景と目的

現代の都市生活は、日常的な忙しさ、人ごみ、社会的な期待に応えるプレッシャー、長時間の通勤、環境の騒音や混雑などが、個人の心身にストレスを与える要素となっている。これらが積み重なり、人々はリラックスや息抜きを求めている。都市生活において、息抜きは外部からのプレッシャーに対抗し、自らが選択する大切な行為である。しかし、その息抜きが制約される場がある。その一例が地下鉄空間である。地下鉄は公共性が高い場所でありながらも、地下の閉鎖的な環境や大勢の人々といった要因が相まって、人々を無機質で機械的な存在に変えてしまう場である。

本計画では、ストレスフルな地下鉄空間に私の息抜き方である背徳行為を助長する建築を織り込み、地下鉄空間のなかで少しでも心安らぐ瞬間を与えることを目的としている。

### 3. 背徳行為の定義

背徳行為とは背徳感を得る行為・行動とする。背徳感とは、罪悪感と優越感が複雑に絡み合った感情と考え

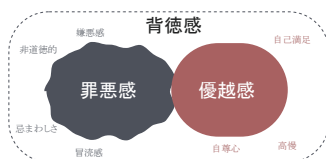


図1 背徳感の定義

る。(図1)倫理や道徳に反する行為や考えによって生じる罪悪感と同時に、その行為が一種の禁じられた魅力を持っていることから生まれる優越感も含まれる。この複

雑な感情は、個人や社会の価値観によって異なる要素を組み合わせている。

### 4. 背徳行為分析

#### 4.1 日常での背徳行為

日常の中での背徳行為を抽出し、その行為における他者との心理的距離を分析し図2にまとめる。



図2 背徳感の定義

#### 4.2 駅での背徳行為

駅の中での背徳行為を分析し、特徴を探る。(図3)

これらの体験は、通勤や通学などの都市生活の中での日常から外れ、自分だけの時間や空間を作り出すことで生まれる背徳感が共通している。通常の駅の利用パターンから外れ、他の通勤者とは異なる特別な体験となり、これが一種の優越感を生み出す。一方で、この優越感には罪悪感も伴う。都市の喧騒から離れ、非日常の体験をすることで得られる解放感が、同時に自己規律を逸脱した行為としての罪悪感を引き起こす。



図3 日常の背徳行為分析

## 5. 空間の構成因子 特徴

### 5.1 場所の見つけずらさ

背徳感を感じる空間を構成する要素はいくつかある。一つ目は、ひとがよりついていなく、自分だけが見つけたという優越感が得られる奥行のある、見え切らない場所であること。

### 5.2 相対を生む空間構成

罪悪感と優越感を生む相対因子が存在すること。背徳感を感じる時、私たちは「〇〇なのに自分は～」といった何かと比較し、他者とは異なる立場から背徳感という感情を獲得する。したがって、空間内に相対性を生むような因子が必要であると考え。これにより、背徳感が他者との比較から生まれ、同時に罪悪感と優越感が入り混じる心理的な葛藤である。

## 6. 敷地

### 6.1 飯田橋駅

劣悪環境な地下鉄駅を探す。有楽町線、南北線、大江戸線、東西線が通っており、駅が狭く複雑な構成になっている飯田橋駅を選定。飯田橋駅は都市生活そのものを具現化したような存在であり、その特徴は地下空間や人の多さなどから浮かび上がる。

### 6.2 地下空間の複雑性

飯田橋駅は地下に複雑な通路や改札が広がり、都市の底辺に位置している。この地下空間は都市の複雑性や多様性を象徴し、人々が様々な方向に移動する様子が都市生活の忙しさのあらわれである。

### 6.3 人の多さと多様性

飯田橋駅は日常的に多くの通勤者や学生、観光客が行き交う拠点であり、その賑やかな様子は都市の中心での生活を反映している。人々の多様な服装や行動は都市の多様性を示し、異なる生活スタイルが同じ空間で共存している様子が見られる。

## 7. 設計概要

### 7.1 設計場所

飯田橋駅の全出口を分析し、優越感を獲得するために、その中で利用者の少ない3つの出口を設計敷地とする。(図4)



図4 コンコース分析図

## 8. 提案

### 8.1 手法

駅は出口を通りすぐに建物、目的地に移動してしまう。本計画では、地上と地下という非現実的なあいまいな空間に潜む環境要素を引き出し、背徳行為を助長する空間を構成する。

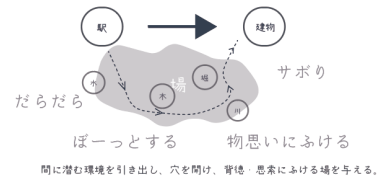


図6 プログラム図

### 8.2 プログラム

PlanA、PlanB、C、は出口の先の機能である緑地、商業、オフィス、を地下空間に拡張し、その周りを広場で満たす。(図7)

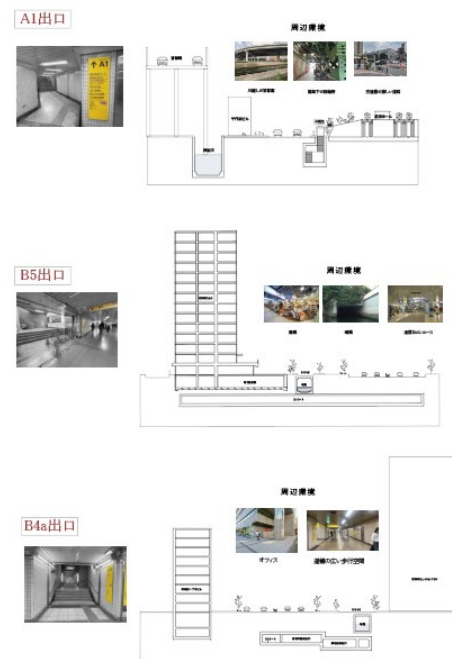


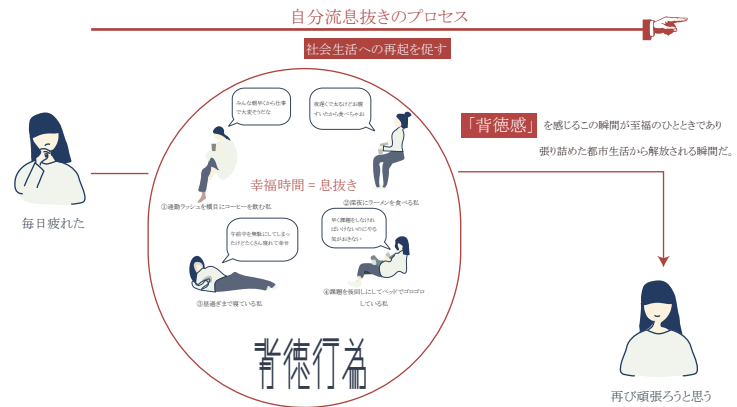
図7 計画地地上と地下の関係性

## 9. 終わり

私の日常の経験から得た背徳というささいな行為を誘う場が都市に少しずつ織り込まれることで、たとえ1人でも誰かのその瞬間だけの幸せにつながることを願っています。

01 Introduction

自分的幸福時間の分析

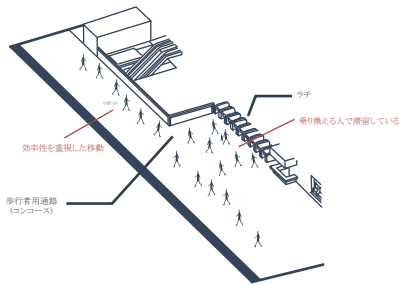


02 Analysis

劣悪な地下鉄空間

02-1 大衆の流れでロボット化した人たち

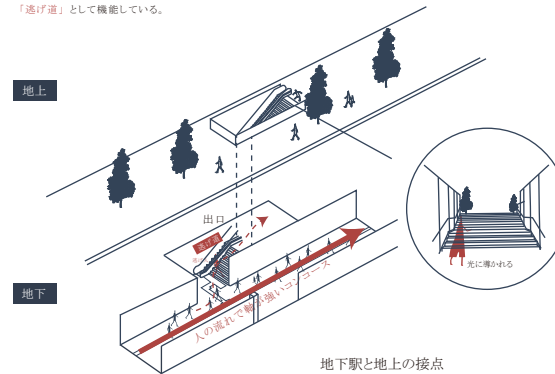
地下鉄内を歩く人は駅内を素早く進み、目的地に迅速に到達するため、ロボットのように効率的に移動している。特に通勤時間帯や混雑した駅でよく見られる。



地下鉄構内の人の動き

02-2 地下空間中の逃げ道

駅のコンコースは効率化した人の流れで強い軸が形成されている。出口はこの中心的軸から外れた位置に配置され、出人々が混雑を避けつつ駅を出るための「逃げ道」として機能している。



地下鉄と地上の接点

02-3 乖離した地上と地下空間

地下鉄のホームやコンコースは地下にあるため、外部の自然光や風景が制限され、地上の開けた空間や外部の都市景観が感じられず地上と地下の関係が乖離しているといえる。



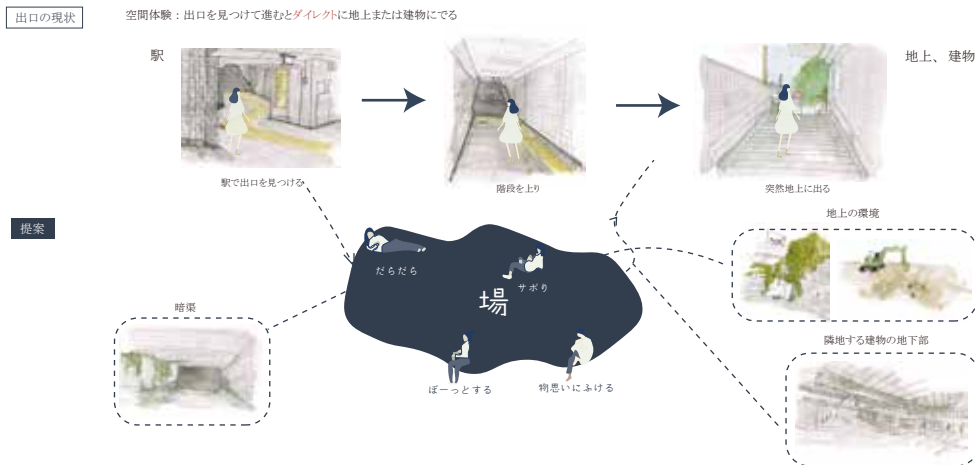
地下鉄の断面構成

03 Proposal

地下鉄空間で背徳行為を体験する

03-1 地下鉄空間に背徳行為という息抜きを助長する場をもうけ、劣悪な地下空間からの一時的な逃避を実現する

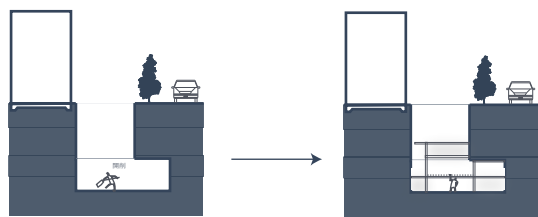
せわしない地下鉄内の逃げ場である出口で提案を行う



03-2 開削による新たな場の形成

地下に新しい空間を作るために地下を掘り進む開削作業を行う。

地下鉱脈や岩盤、土砂などを掘削して、新しい空間のためのスペースを確保する際に、雁行した空間構成にすることで狭い場所や開けた場所など様々な場を形成することができる。



掘ること  
隙間、余地をつくる

建てること  
空間をつくる

PlanA 都市を眺める俯瞰場



PlanC オフィスと都市の間を紡ぐ光広場



PlanB



日常生活と地下空間を縫む親水場